

## 秋

水野 仙子

汽車は薄暗い杉の林をぬけて、やがてしづ／＼と明るさに進んだ時、私の眼に展<sup>ひら</sup>けた窓の外の眺めは懐しいものであつた。空に漂ふ雲の姿を寫した沼が、形ちよく揃つた松の脚の間にちら／＼と輝いて走り、黄ばんだ原の草に織り込まれた秋草の色が、遠目にもそれと見分けられる。遙かに稍<sup>やや</sup>濃く墨をもつて描いたやうな連山が、いかにも廣濶とした背景を偲<sup>おも</sup>ばせて、澄んだ空氣の中に午後の日がほか／＼と満ち渡つてゐる。——穩かに、悠々と汽車は私の志す停車場へと私を運びつゝあつた。

それは私の生涯に浸<sup>し</sup>み徹<sup>とお</sup>るやうな記憶をとゞめるところの、ある思ひたちであつた。半生涯を劃<sup>く</sup>る線の太く鮮かでありたいために、曾て煩<sup>わづ</sup>はしいものとしてみかへらなかつた故郷に、不思議に暖かな心を抱いて歸つた私は、野にも山にも、家にも人にも、さては昔手馴<sup>お</sup>づけた黒猫の老耄<sup>おいぼ</sup>れた穢<sup>きた</sup>ならしさにも、漂ふやうに私の愛の展<sup>ひ</sup>けて行くのが感じられた。父母の墓参りもすみ、倉の隅につくねてあつた一行李の、昔の夢をとゞめた文殼<sup>ふみから</sup>や日記の始末にも一日を過した。さうして上京の日は近づいた。今日しも私は、弟夫婦の營<sup>い</sup>んでゐる店を出て、町から一里あまり隔たつた村の牧場に、久しく見ない友を訪ねるべく思ひたつたのであつた。

その停車場は、私が今度歸つてみて初めて知つた停車場で、つひ一二年あとに出來た新しいさゝやかな停車場なのである。軌道の兩側に築いた短いプラツトフォームの後には野が續き、改札口の柵にはまだ木の香が残つてゐるらしくも思はれる。小さな場内を一足出ると、すぐに草原をよぎつて細い道が僅かについてゐる。目にみえる人家といつては、まばらな松の間にみえる一軒の運送店と、原の中に孤立した一つの官舎とが認められるばかりで、その新らしい塀の中に、車井戸のきしるのがつき離れて音高く響いてゐた。

見馴れぬ人に目を敬<sup>そ</sup>べてた驛員らに道を問ひそびれて、私はあてもなく心覺えの方角に歩みを運んだ。年々秋になるとよくこゝらに茸狩りに來たものであつたが、これだけのものでも切り開かれた爲めに、いくらか私の記憶を紛<sup>ま</sup>らはして、心許なく私は一本の細道を辿らなければならなかつた。振りかへつてみればもうアカシアの一繁りを置いて、その蔭<sup>かげ</sup>に一つの停車場を思<sup>う</sup>ひ泛<sup>う</sup>べるのが困難なほど、あたりは人の世界に遠ざかつたものであつた。丁度ミレーの繪のあの敬虔な人達の後に現はれた背景のやうに遙かに展けた一帯の開墾地は、ところ／＼に廣野を劃<sup>く</sup>るアカシヤの並木を残して、地平線に流れて溶けあふ空の下に、靜かに／＼憩<sup>み</sup>ふてゐる。徑<sup>みち</sup>を奪つて繁つた草は私の腰を蔽<sup>お</sup>ふて、それを分

けて行くたびに、踏まれて靡く草はまた私の袂の後にのびかへつた。音といふ音は、そのさら／＼いふ囁きと、私の生命が息づく血の流れだけであつた。

私は稍々不安心になつてあたりを見廻した。道を訪ふにも人ひとりの影もなく、後になつた繁りのかげに車の轍の音は響いてゐるけれども、その往還まで引きかへすには私はあまりに先に進んでゐた。と暫くして人の足音らしい音にふと振り向くと、それは今この野が生んだのではないかと怪しまれるほど突然に、一人の女の子がすた／＼と私の行く方へと躓いて來るのであつた。私は立ちどまつた。女の子は今學校の歸りらしく、田舎のことゝて袴はつけてないが、汚い風呂敷に包んだ着物が、肩から脇の下へと斜めに結ひつけてある。

『一寸、あんた役所の野中さんのうち知つてない？』

私が言葉をかけると、女の子は黙つてたゞ首を下げた。

『知つてるの？』

またぼくりと首がさがる。

『どう行けばいいの、教へておくれな。』と、私はなるべく言葉をぞんざいにして言つた。女の子は私より先になつた、猶首をうなだれたまゝ二三歩すた／＼と歩いたが、私が困つたやうに追ひついて再び問ひかけると、

『おら、そつちさ行ぐんだア。』と伏目になつたまゝ言つて猶一層早足に歩き出した。

私はやつと安心をした。この子のあとに躓いてさへ行けばいいのだ。だけどまあなんといふこの子の足の早いことだらう！ 私は初めはそれと一緒にならうと一生懸命歩みを早めてゐたが、さうすればするほど女の子は早足になるやうな氣がする。私はふと氣がついて、私の容子がいくらか都馴れてゐるのが、この子にある壓迫を感じさせるのだらうと、それから強いてはその子に追ひ躓かうともしなかつた。私の唇には微笑がのぼつた。私は自分の昔の子供心を思ひ起して、この子は私に、人間に最も普遍的な一つの徳であるところの好意を持つて居ること、さうしてこの子は私を導いて行くといふことに、一つの善事とそれに伴ふある満足と矜りとを感じてゐること、けれども私からあれこれと話しかけられるのを怖れてゐることなどを量り知つた。

なんといつても素朴な心は懐しい。誰か生れながらにしてこの心を持たぬ者があらうか？ さうだその素朴を失つた人ほどそれ自身に取つて不幸な人はないのだ。愛を持たぬ者には愛の酬ひがなく、誰か愛の賜をその血に授けつがぬものがあつたらうか？ 自らの賢しさの爲めに、持つて生れた愛をその胸に冷たくされた人は、この世に於て最も不幸な人であらなければならぬ。愛は恵みである。

今、野にも空にも天地の愛は廣がり、土は草に、草は木に、その各々の愛をひらき交すことに悦びを感じてゐる。さうしてそれは私の胸にまで優しく訪れた。私の胸に湧きかへつた愛はまづ何ものに向つて流れなければならなかつたらう！私は私の前を五六歩離れてすた／＼と行く女の子の後姿を眺めた。踵かかとのそ／＼くれた藁草履わらざうりに土が眞黒く浸みてゐる。私はなんとかしてこの子を喜ばせるやうなことを言ひ、またそれによつて自分もその喜びをわかたれたいとは思つたけれど、それが却て氣づまりに思はせるのを恐れて思ひ止まらなければならなかつた。

道は漸くにして開墾地特有の黒い土になつた。薄暗い杉の林の日蔭になつたあたりには、生き惱んだ轍わだちの跡が深く掘れて泥水が溜つてゐる。蹄ひづめの跡はそこ／＼に入り亂れて、下駄の齒の踏み入れどころもないほど、掘りかへされてゐる。と、女の子は茨の中を掻き分けてするりと畑の中に出た。さうして私にもさうせよといふやうに一寸振りかへつてまたすた／＼と歩き出した。

畑はまだ鋤すきのはいらぬらしいところで、残つたものゝ根の間に勝手に生え繁つた草が、でこぼこした畝を隠してゐるので、歩き憎いこと甚だしい。肥えた苜蓿うまいやしのこぼれ生えが、ところ／＼に薄紫の花をつけてゐる。どこともなく人聲が耳に入ると思ふと、のんびりとした牛の鳴聲が森のかげに聞えて、いよ／＼牧場に近づいたことを知らせる。農具をつけた馬を曳いた男や、小山のやうに乾草をつけた馬などが時々行きちがふ。やがて樹木のかげに畑けむりがゆら／＼とのぼるのがみえ、役所の前の半鐘の頂きが見え出した。それは野良に出てゐる農夫らに、晝時ひるときや午後の休息を知らせるために打つもので、この株式組織の一大牧場は、役人と農夫と、その外少しばかりの關係者とから一つの部落を形ち作つてゐるのであつた。

私達がとう／＼その役所の前まで出た時、すべての人と獸はそれ／＼の仕事に従つて働いてゐた。或小屋の中には一匹の馬が、何かを碾ひくために二本の綱をつけて、穀物のぐるりを靜かに首を垂れてめぐつてゐた。それは涙がこぼれるほど柔順に哀れ深く小屋の中をめぐつてゐた。牛は柵の中にのどかに草を喰はみ、或は小屋の中に犢ごうしを養つて居た。百姓家の軒の下では、子供を抱いた女や枯杉葉を前掛けに集めて來た子供等が、見馴れぬ私を従へた先の女の子に、物問ひたさうな眼をむけて、それから私を珍しさうに見送つた、

友の家の屋根と、はね釣瓶つるびんの竿の先がもうそこにみえる。私はこの女の子に、たゞ「有難う」一つだけでは足りないやうな氣がした。そつと懷の財布から小さな銀貨を握つてゐると、

『野中さんそこあそこだア。』と初めてはつきり口を利いてそこを指さした。私はその手にそれを握らした。さうして、

『有難うよ、有難うよ。』と二つ言つた。

女の子は銀貨を握つた手を額のあたりまで持つて行つて頂くと、顔を眞赤にして竹藪の中に見える家へと驅<sup>か</sup>け込んで行つた。

温かな心をもつて友に會ふことが出来るのは幸福なことである。暖かな心をもつて迎へられ、猶更のこと、私はつくぐと今、友が心から喜んでくれたことに對して、この四五年來のうとくしさをすまなく思つた。さうしてその頃の自分の心の姿を、寂しく慘<sup>みじ</sup>めに思ひやつた。今の心持ちから思ひ出に溯るのは随分遠いことではあるが、まだ私の若かつた頃——私は今惜しげなくさういふことが出来る——愛した人との一年足らずの生活から（そのためには随分父母に心配をかけた）空虚な心を抱いて通れてからといふもの、如何なる人の眞實<sup>しんじつ</sup>をも信ずることが出来ないといふ、この上もない不幸のうち二三年に送つた。その心のかたみは、若い癖に寂しく、強いて獨りを衛<sup>まも</sup>るやうな勝氣に、どこやら皮肉な微笑みをたゞよはしたその時分の寫眞に残つてゐる。（私はこんどを機會にして、その忌はしい遺品を焼いてしまふ積りである。）

あゝ女教師の生活はどんなに冷たく呪はしいものであつたらう！ それは私の心がらとはいへ、第三者となつた今の私の目からは、忌み嫌ひ憎みつゝも猶同情のされるものであつた。けれども私は恵みに浴した。ふとしたことから聖書を手にした私は、器に盛つたやうな愛の解釋を、廣い海原に溶き流してしまはなければならなかつた。私の心は知らずくのうち和むで行つた。丁度その頃からYとは知るやうになつたのである。

私は初めはやはりYをも信ずることが出来なかつた。けれども私の心に皮肉と傲慢とは影をひそめてゐた。私はYの純な眞實<sup>しんじつ</sup>に對して悶えた。さうして少くもその心持ちは眞劍であつた。苦しめば苦しむほど不思議に私の心は神に近づいて行つた。結婚といふことに、私自身はまだく先の明るさを豫想することは出来なかつたけれど、このやうな者でも何かの役に立つならばといふやうな、謙遜な心から私はその問題を解決した。その時私は、自分でも思ひ設けなかつたやうなある優しい感情の湧いてくるのを覺えて、私は思はず嬉しさに泣けたのであつた。

囚人のやうに暗く曳いて來た、重い冷たい呪はしい、固<sup>かたく</sup>な心の鎖を絶つてから、私の胸に萎<sup>しぼ</sup>んでゐた愛の芽は、長い冬から春の光りに浴したやうに、日にく芽ぐみ萌え出すのを私は意識した。私はYを愛するやうになつた。すべての邪念は去り、すべての冷たさは溶けた。新しい世界は、私の會て思ひも及ばなかつた暖かさをもつて私の身邊を包んだ。私の手に結んだ水は温み、私の笑顔は如何なる澁面をも打ち解くことが出来るやうにさへ思へた。その時永久に腹をたてゝはならぬ<sup>おきて</sup>誑<sup>あざわら</sup>を定め

られても、私はあまり困難を感じなかつたに違ひない。さうしてそれは、昔私が一人の男にそゝいだ愛とは似てもつかぬ、もつと／＼宏いものであらなければならぬと心掛けるのである。

私の友は見違へるほど老けてゐた。一人目の女の子は、私の知らぬ間に生れて、そしてもうとこ／＼歩きをしてゐた。グラスに充たされた美しい搾りたての乳や、見事に實つた玉蜀黍とうもろこしやがもてなされた。なほこぶしの肉をどうしてかうしてなど、臺所だいどころの妹に指圖さしずしてゐる聲を聞きながら、私は縁側に並べてあつた茸の一つを取つて、そのかさを撫でて見、その匂ひを嗅いで見た。大きなとさかを振りたてた鶏が、こゝこゝ言ひながら栗の皮を啄んでまた放しては啄んでゐる。なんといふ静かな住居であるのだらう！牛の聲は絶えず家のぐるりに響いて居るけれど、それは決してこの里の静かさを損ねるものではなかつた。

私は下駄を履いてパリヤの咲いてゐる庭に下りたつた。鶏小屋の中をのぞいてみると、巢に籠つてゐた一羽の牝鶏めんどりが、薄暗い中から不安さうに首をのべて、小さな眼を頻りに瞬またたきさせてゐる。それに隣つた舎網の中には、女夫めのとの兎が眞白く蹲うすくまつて、薄紅い鼻の兩脇ひびの髻むげをふるはしながら、私の近寄る匂ひを嗅いだ。

『兎つてほんとに能なしなものですね。』

友は薄くなつた鬢の毛をぐい／＼と櫛の齒で掻きあげながら、私に近よつて來た。

『さうですか。でもいつみても兎つて格好のいゝもんですわね。』

『それは私達がかまへたんですのよ、そりや面白うござんしたわ。』

この土地の人ではない友は、濁つては來たけれどやはり都の言葉を使つてゐるのだつた。

『ね、今度は長くいらつしやられるのでせう？せめて三晩位は泊つてらつしやらなくちやあ、ほんとに／＼久しぶりなんですもの。あしたは茸取り、それからあさつては——さう／＼一度父に獵に連れてつて貰ひませう。馬車に乗つて行くんですよ、朝早く、それはもう眞白な霧の中を、牛乳を運般する馬車が、えゝ／＼それに私達も乗りますのよ、ごと／＼ごと／＼と行くんですわ——あゝ、私も狩りにはめつたに連れてつて貰ひませんけれどね、あの氣持ちはほんとになんともいへませんわ。』  
私はなんだか自分が露西亞ロシアの小説の中にでも生きてるやうな氣がして、一寸の間自分の現在まうろうが朦朧もうろうとなるのを覺えた。

『あゝ！——』

譯もなく私は溜息を洩した。『一晩だけはね、ご厄介になるつもりでまゐりましたけれど——』。  
あすは、私は友とこの野に別れを告げなければならぬ。そのためにこそわざ／＼こゝも訪れたのだ

もの、私はまづすべてを友に語らなければならない。

私達は家から十間とは離れてない沼のふちに添うて、萱の間を分けながら向ふ岸の方へと廻つて行つた。紅茸の鮮かなのを小笹の根に踏みながら、私は、過去や未来や、愛や悩みや、都の巷ちまたの雑聞ざつとんやを、胸一つばいに繰りひろげてみた。静かな林の中に栗の實でも落ちるらしい音がして、敬てた耳には猶一層の静寂がしのび込んだ。

私の胸はさまざまな思ひを語つてみたけれども、私の口はいつまでもまだ閉ぢられたまゝであつた。しかしこの場合ひそれは決して不自然なことではなかつた。

『あゝ、馬車が行く!』

と友は呟いて、松の樹の根に二人が腰を下せさうな場所を見付けて近寄つて行つた。

耳をすますと、なる程轍わだちの音らしい響きが、往還の方にこと／＼と遠ざかつて行く。午後  
の牛乳を運んで、そこ／＼の家の買物を兼ねながら、私の町へと馬を驅つて行くのであらう。

鏡のやうに静かな沼の面に、覗き込んでゐるやうな岸の松影がかすかにゆら／＼と揺れて、樹の間を透いた夕日がそろ／＼あたりに照り映えて來た。

【入力者注】原文にはほとんどふり仮名がありませんでしたが、

読みやすさを考慮して入力者の判断で加えました。

ご感想やご希望などがありましたら、

お知らせください。

以下の修正を行いました。

40頁13行 接けつがぬ ↓ 授けつがぬ

初出・底本：「國民文學」大正三(1914)年十一月

テキスト入力：小林 徹

公開：令和三(2021)年二月二十三日

改訂：令和五(2023)年六月二十三日

リンク：[水野仙子ホームページ](#)